

## 米国カリフォルニア州オークランドの小学校

— 訪問調査から見てきたこと —

富澤 美千子\*

### はじめに

2015年9月8日～13日、日本学術振興会特別研究員として、科学研究費特別研究員奨励費により、カリフォルニア州オークランドの小学校を訪問調査する機会を得た。今回の調査は、2014年度夏に、文化・歴史的活動理論 (cultural-historical activity theory) に基づく放課後教育活動の研究で世界的に高名な、カリフォルニア大学サンディエゴ校 (University of California, San Diego) のマイケル・コール教授 (Michael Cole) のもとを訪ね、その後、2015年3月にカリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) で行われた University-Community Links (UC Links) 2015 Conference において研究発表を行ったことの延長線上で得られた機会である。2015年3月の会議では、カリフォルニア大学の各分校において、放課後学習の研究に

取り組んでいるグループが、それぞれの実践研究について発表する場であったが、放課後学習を含む、カリフォルニア州の小学校における教育システムを調査することを通して、学習文化の創造に関する研究の新たな知見を得ることを計画したところ、会議の実行委員長だった、バークレー校教育大学院 (Graduate School of Education) UC Links のチャールズ・アンダーウッド所長 (Charles Underwood) とリーン・パーカー副所長 (Leann Parker) に協力いただき、今回、訪問調査が実現することとなったのである。

### 1. カリフォルニア州の学校段階別教育の概況とオークランドについて

#### 1-1 カリフォルニア州の学校段階別教育の概況

カリフォルニア州において、公費によって教育が受けられる期間は、日本における年長組の年齢から始まる (Kindergarten)。義務教育期は、満6歳から10歳までの小学校1年から5年までの Elementary School、6年から中学校2年 (8年) までの Middle School、そして中学校3年 (9年) から高校3年 (12年) までの High School の期間である。小学校3年生までは20人学級、4年生以上は30人学級が標準である。学区によって相違があるが、基本的に8月末～6月中旬が年度の区切りであり、2学期制が基本である (2～4学期、あるいは年度中区切りのない学校も存在する)。しかし、どの学校においても、州の統一学力試験を、小学校2年～高校2年 (11年) は、毎春受験しなければならない。また、



写真1 チャールズ・アンダーウッド所長とリーン・パーカー副所長とのランチミーティング

\*とみざわ みちこ 奈良女子大学大学院・日本学術振興会特別研究員

卒業試験が存在し、高校1年生(10年)の2学期以降から高校3年生(12年)の卒業時期までの間に、英語と数学の試験を受けなければならず、チャンスは6回ある。これに合格しなければ高校修了の資格は得られない。小学校は学校のプログラムで子どもたちが授業を受けるのに対し、中学校からは生徒によって時間割が違い、ホームルーム以外は各自の選択に任されている。高校においてはホームルームもなく、各自の進路に応じた履修をすべて選択する。ただし、高校を卒業し進学するための資格(High School Diploma)の条件があり、進学のためにはそれ取得しなければならない。しかし、高校卒業のみの目的であれば、単位を取得できれば12年生修了前に卒業が可能である。

### 1-2 オークランドについて

オークランドという都市を理解する上で、特筆すべきことがあるとすれば、1991年に発生したオークランド・ヒル火災(Oakland Hills Fire)と多文化・多人種・多民族の社会状況であるだろう。

オークランド・ヒル火災は、小規模な山火事が、強風と乾燥のために市街地まで燃え広がり、町が火の海と化した火災である。この火災の死者は24人、焼失家屋はおよそ3,000棟であった。オークランドの人々の脳裏に新しい災害として、出会った多くの人々から話を聞いた。オークランドの学校を案内してくれたタマラ・ストラックさん(Tamara Sturak)によると、オークランドの治安の悪さは、1960年代終わりから犯罪発生率が急上昇してきたことによるものだが、この火災の翌年には175件の殺人事件が起きたとのことだった。また、強盗や車両盗難事件は全米でも最も高い発生率であり、カリフォルニア州で最も治安が悪い土地であると言われている。貧困の原因については、本報告では詳述しないが、そもそも1906年のサンフランシスコ大地震後に被災者が多く移住し、大幅に人口増加し、とりわけ人種が多様で混成率が非常に高くなった頃から、治安の悪化は急速に進み、さらにその後のオークランド・ヒル火災でダメージを受けたことが大きな原因と考えられ

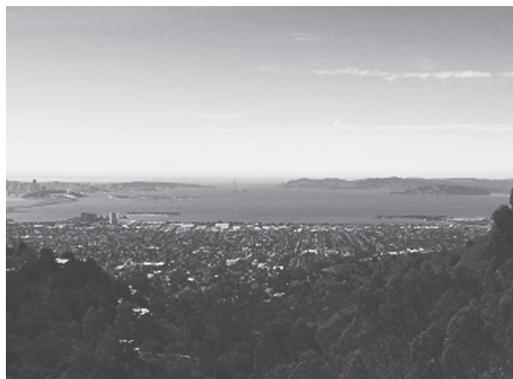


写真2 タマラさんが連れていってくれたオークランドの山の上からの写真。景色を見ながら、オークランドの土地について話してくれた。

るということであった。しかし、オークランドに長年暮らしているタマラさんは、治安が悪いのは一部であり、オークランドは住みやすい所だと言う。そして、大好きなオークランドだから、少しでも子どもたちの支援をしたいと言うのである。

とはいえ、今回は Elementary School の3～4年生を中心に、3校の授業参観及び1日の学校生活を調査したが、学校の置かれている場所の治安の悪さと多文化・多人種・多民族の状況については明らかであった。

## 2. St. Anthony School

### —ラテン系アメリカ人のカトリック学校

私立のカトリック学校であるこの学校では、KindergartenからMiddle School(8年生)までが同じ校舎で学ぶ。High Schoolは別の場所にある。学校の資料によると、学生の構成は、ラテン系アメリカ人(Latino)75%、アジア・太平洋諸島からの移民24%、アフリカ系アメリカ人1%となっている。ラティーノの家庭は、英語の読み書きが不自由な家庭も多く、そのためカリキュラムは、国語(読み書き)、数学、社会、サイエンス、宗教をコアカリキュラムとしている。さらに、この学校で最も驚いたことは、テクノロジーの充実である。iPadが25台入るカートを持っており、必要なクラスへカートを持って行き、各自調べ学習に活用している。

St. Anthony Schoolだけでなく、今回訪問した

すべての学校において、それぞれの支援団体により、放課後学習（After School）が行われている。放課後学習といっても、学校が終わった夕方だけをさしているわけではない。それについては、ほぼ同じようなプログラムであったので、まとめて後述したい。とにかく、St. Anthony School の放課後学習をすべての児童に無償で提供している The 21st Century Community Learn-



写真3 St. Anthony Schoolにて、左から3年生のAfter School教師、Day School教師、学校訪問支援者のColetteさん、筆者

ing Center (CLC) は、それだけでなく、希望する家族に、英語の読み書きトレーニングも行っている。昼間の学校教育についてもカトリック教会による財政援助があるため、朝6時25分から夕方18時まで、朝食、昼食、間食が無償で提供されている。ただし、この学校においては、家族の学校への奉仕活動を年間20時間義務付けており、行えない場合は1時間10ドルの料金を支払う義務が課せられている。

3年生のサイエンス授業を参観したが、子どもたちは図書室の床に輪になって座り、積極的に授業へ参加し、まじめに教師の発問に答えていた。

### 3. St. Martin de Porres School

#### — アフリカ系アメリカ人のカトリック学校

St. Martin de Porres School もまた、8年生までの私立のカトリック学校である。そしてこちらは、子どものほとんどがアフリカ系アメリカ人である。この学校も The 21st Century Community Learning Center (CLC) によって、無償で放課後学習が提供されている。また、Day Schoolにおいても、カトリック団体の寄付による支援がある。

この学校で驚いたことは、Kindergartenの子



写真4 3年生のサイエンス授業



写真5 St. Martin de Porres School の正面玄関

どもたちの利発さと身体能力の高さである。St. Anthony School のラテン系アメリカ人の子どもたちが、従順でおとなしく感じるに対し、とにかく明るくよくしゃべる。よく動く。動きの速さと騒がしさに、明らかに違いを感じた。しかし、5年生から Middle School になると、子どもたちは、急に眼が曇ってくる。よくしゃべる言葉が、攻撃的に感じられる。モチベーションの低さ、集中力の無さや、脱力感も感じられた。ラテン系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人との違いについての考察は、今後の課題としたい。しかし、そのように子どもたちが活発で、高学

年から指導が難しくなるためか、服装の規定が厳しく、保護者に対する指導や書類提出の方法などのきまり事も多く、管理的な色彩が感じ取られた。



写真6 3年生の国語授業



写真8 5年生の After School



写真7 Kindergarten の After School



写真9 ランチルーム

#### 4. Manzanita Community School — オークランドの公立学校

Manzanita Community School は、Kindergarten から5年生までの小学校（Elementary School）である。こちらの学校は公立学校であり、児童数は400人ほどである。

学校の資料によると、人種構成は、ラテン系41%、アフリカ系33%、アジア系15%、その他8%となっている。私の参観した3年生のクラスは、20人ぐらいの子どもたちに対し、その国籍は、13カ国にも及んでいた。この学校の46%の子どもたちにとって、英語は母語ではないということである。このためこの学校は、子どもたちの英語教育だけでなく、親の英語教育や、親が在宅で働けるための指導など、家族の教育も支援している。しかし、貧困家庭が多く、低所得家庭の子どもたちにはアメリカ政府による無償の夕食配給があるため、子どもたちのうち

の20%は、朝食から夕食まで、学校の配給を受けている。朝8時から8時30分に朝食をランチルームで食べてから、昼食、間食を食べ、約80人の子どもたちは、17時30分から18時までに夕食を食べてから帰宅する。

教師の指導力は高く、授業はリズムよく、わかりやすく進められる。また、授業の途中に、



写真12 3年生のサイエンス授業



写真10 Manzanita Community Schoolの正面玄関



写真13 3年生の個別指導



写真11 Kindergarten 授業風景

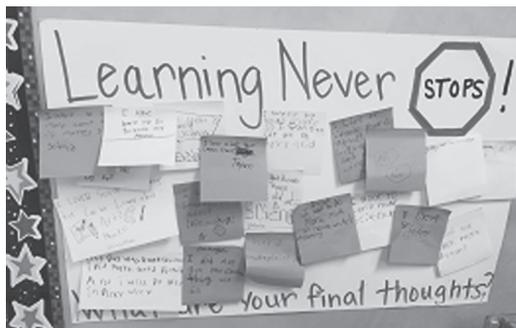


写真14 3年生のクラスの掲示。毎日子どもたちは、帰る前に「自分が今日の最後に考えたこと」を文章にして、掲示していく。

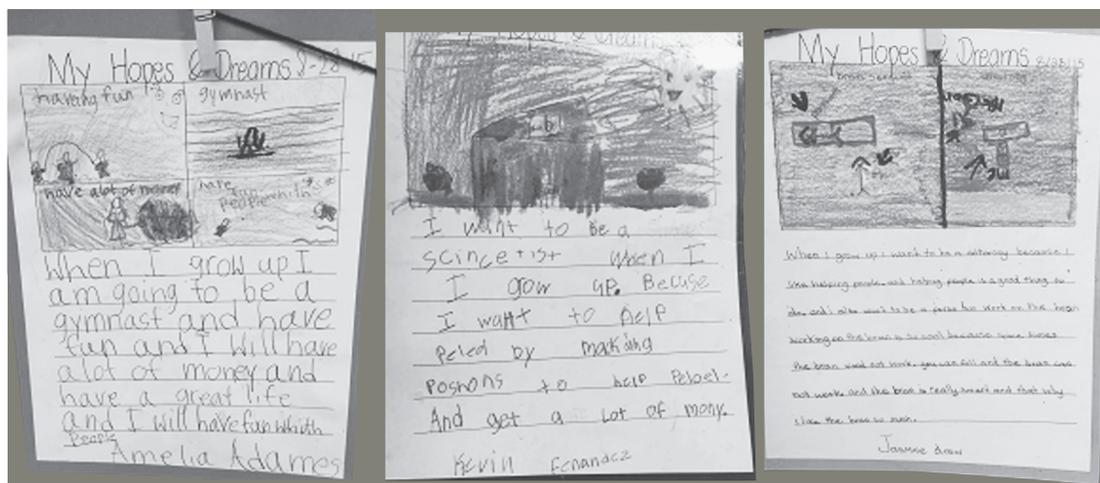


写真15 教室掲示「自分の夢」

特に言語に問題がある子どもを抽出して、傍らで個別指導が行われる。子どもたちもコミュニケーション能力が高く、どんな言語圏の相手であろうとあまりこだわらない様子であった。ここでは、互いの間に違いがあることが、教室という社会の当たり前の前提になっているのである。

### おわりに

今回の訪問調査を通して、アメリカにおいて After School が何故必要とされるのかについて、日本との違いも含めて理解することができた。アメリカの学校においては、After School と Day School の教師間の連携は必然的なものであり、協力して指導していくことが学校教育の遂行に不可欠となっている。アメリカにおける人種・民族の多様性や貧困に起因する教育の難しさは深刻である。どの学校も、そのような困難な諸条件の中で、それを乗り越えて子どもたちの学習と発達を支え励ます毎日の教育実践を格闘と共に創り出そうとしている。しかし、同時にどの学校も、その教育実践は、社会の大きな矛盾に直面するものともなっている。子どもたちは、義務教育課程を修了し、学校の外に出ると、すぐさま貧困の現実に向き合い、その日から整った食事の機会を失ってしまう。また、Manzanita Community School では、どの子も綺麗でカラフルでスタイリッシュな私服を身に付けていたが、

それらの服はすべて寄付によるものということだった。そのような寄付を受ける機会も、学校を出れば子どもたちは失うのである。学校にいる間に知識や技術、資格を獲得していなければ、多くの場合、修了と同時に、貧困のどん底に落ちてしまうリスクにさらされなければならない。決して簡単には解決できないこのような社会的矛盾に、どの学校も直面し苦悩しているといえるだろう。

今後、引き続き研究調査と考察を必要とする課題も明らかとなった。その第1は、アメリカの学校における著しい多文化・多言語の状況下で取り組まれている言語やコミュニケーションの教育と子どもたちの資質・能力の育成との関連性の検討である。こうしたアメリカの教室が持つ社会的環境の多様性とダイナミズムは、まだまだ単一性と同質性を基本的な性質とする日本の教室文化とは掛け離れたものであるが、学校教育の将来的なあり方をめぐり非常に重要な検討課題であるといえよう。

第2は、学校における ICT の利活用の問題である。参観したどの学校でも、ICT の利活用は盛んであったが、それが子どもたちの思考力の育成にうまく結び付いているような実感は持てなかった。これは、日本の学校で見られる光景と変わらないものともいえる。テクノロジーの学校教育における活用に関し、さらなる考察が必要であるだろう。

第3は、子どもたちの食生活と食育をめぐる課題である。訪問調査では、食事について、アレルギー体質の子どもが急増していて、特にピーナツアレルギーが社会問題になっていると聞いて驚かされた。ピーナツはアメリカ人が大好きなものであると日本人の多くが思っている。それが、全く食べてはいけないもののひとつに数えられているのである。子どもたちの食に関する現代的な課題の検討が必要といえるだろう。

そして第4に、親の、自分自身を含む、生活に対する希望と、子どもたちのモチベーションとの関係についてである。低所得の家庭の子育てを支援するために、アメリカ政府は食事の配

給を行っているが、それにもかかわらず、実際は食事を残す子どもたちが非常に多いことに大変驚いた。しかし食事を残す多くの子どもの体型は、肥満傾向にある。それについては、親が深夜に帰宅して、自分の働いている店の残り物やジャンクフードを持ち帰り、それを子どもたちが食べている可能性が非常に高いからではないかという説明を受けた。親は、自分自身の身体の健康や、子どもの発育のための食生活を考えるという視点が全くないというのである。また、このことから当然予測できることであるが、子どもの学習状況や毎日の宿題に対しても、このような親たちは全く無関心である。そもそもこのような子どもの親は、自分自身の健康や生活への意欲が高くないのである。このことは、子どもたちが高学年になると、無気力で脱力感があり、学習意欲が低いということと因果関係があると考えられる。それを改善するにはどうしたらよいか。さらに調査・研究・考察が必要であるだろう。

最後に、今回の学校訪問の中で印象深かったことであるが、どこにおいても日本人に全く会わなかった。どの学校に行っても「私は日本人です」と言うと、子どもたちが大変喜んでくれた。これだけ多くの多様な人種・民族が共に暮らし生活している土地にもかかわらず、子どもたちは、大好きなポケモンを創った国、日本の

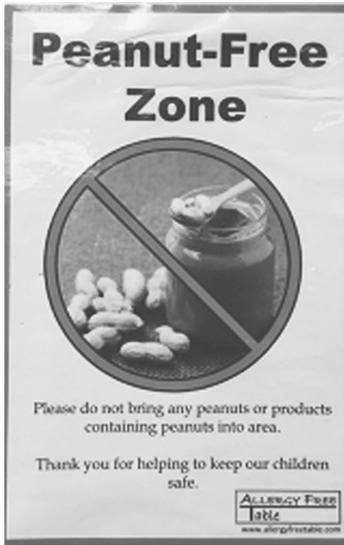


写真16 ランチルームにあったピーナツ禁止の掲示



写真17 PC ルームでの After School



写真18 3年生の子どもたちがくれたプレゼント

人には会ったことがないというのである。子どもたちに喜ばれながら、不思議な申し訳なさを感じた訪問でもあった。

<付記>

本訪問調査は、2015年度 科学研究費特別研究員奨励費（研究代表者：富澤美千子、課題番号：26・2166）の補助を受けて実施されたものである。支援に感謝申し上げたい。